

## 与謝野晶子の批評

——ベルグソニズム受容を視座として——

野村幸一郎

はじめに

与謝野晶子は「鏡心燈語」<sup>(1)</sup>において、「私は大隈党の實際政治にも政友会の政治意見にも、ベルグソンやロダンの現代思想と更に一点の共鳴する所さへ認めることの出来ないのを口惜しく思ふ」と述べている。この言辞は、ベルグソニズムを視座として、同時代の思想・政治・文化について批評を展開しようとする意図が、大正期の晶子にあったことを物語っている。

このような眼で晶子の評論をいま一度、閲してみた場合、たしかに発想の形式や用語の使用法において、ベルグソンとの一致点を指摘することができる。たとえば、「優れたものであると自認する新しい思想を提供してこそ、世界人類の創造的進化に参加して各人が実力相応の貢献を為し得る」<sup>(2)</sup>という言辞がそれにあたる。けっして固定化することなく生成変化を繰り返す、個人に内包された生命が、物質世界を支配していく過程を自由創造的進化と読んだ、ベルグソン思想の援用であることは間違いない。以下の考察においては、晶子の社会批評、文明批評とベルグソニズムとの関わりについて検討していくつもりであるが、まずはその前提として、

大正期におけるベルグソニズムの受容の在り方について俯瞰しておきたい。

### 霊と肉の一致へ——大正期のベルグソニズム

大正期、ベルグソニズムは生命論が言論界を席卷した時代状況を背景として、移入されている。ベルグソンの思想は明治四十年代の欲望自然主義の反動、あるいは乗り越えとして、つまり、人間に内包された精神的価値を復権するための新しい思想として、大正期に紹介されたこと、ひとまず言つてよいであろう。

たとえば、野村隈伴は「ベルグソンとニイチエ」<sup>(3)</sup>において、ベルグソニズムの文明史上の位置を説明している。隈伴は「近代の学科」<sup>ママ</sup>が「人間の意識を自由勝手に分析し、逐には人格とか意識の統一とかは存在しない、唯知性と本能との争ひのみであると揚言」するに到つたと説明した上で、ベルグソニズムの現代的意義を次のように説明している。

知性に従ふ者は、徒らに空想に耽り、形式に流れて、所謂理想主義の哲学を代表し、本能に従ふ者は、之に反して経験を重んじ現実を尊ぶ實際主義の哲学を代表する。知性は浪漫主義の本尊となり、本能は自然主義の本尊となつた。しかし自己は決して、知性でもなければ、本能でもない。(中略) この矛盾を脱却し、更に深い自己の中に、確かな根底を捕へやうと努力したのは、最近の思想である。此の点に於いて、新浪漫主義とベルグソンやオイケンなどの哲学は、其の軌を同じうするものである。

隈伴の言う「知性」とは合理的な分析能力、つまり理性だけをさすのではなく、あるいは、それ以上に、本

能の対立概念として用いられており、しかも、浪漫主義の基盤として位置づけているのであるから、精神的価値という意味合いが濃厚であるように思われる。限伴は、精神と身体という二元論的対立を解消していくところに、ベルグソニズムの哲学上、文明史上の意義を求めている。管見に入った限りにおいても、同様の認識は、三宅雄二郎「ベルグソン哲学梗概」<sup>(4)</sup>、稲毛詛風「日本現代思潮梗概」<sup>(5)</sup>、無署名「ベルグソンとタゴール」<sup>(6)</sup>などの文献においても、確認することができる。同時代においてほぼ共通の認識が形成されていたと、言ってもよいであろう。

ベルグソニズムのこのような理解と移入の在り方は、生命論が論壇を席卷した大正期の知の遠近法が、力学として作用している。蘆田慶治は「オイケンの神観」<sup>(7)</sup>において、「人間の本性に根本的矛盾の存するのを指示す其矛盾の一方には唯物主義、自然主義となつて現はれる生活があり、他の方には理想主義となつて現はれる者がある。／この根本的矛盾を超越するの活路ありや。若し之なしとせば、吾人はすべて霊的生命の要求を全然放棄すべき羽目に陥るのである」と述べている。「霊的生命」の存在を認め、「その要求」に耳を傾けていくことよつてのみ、「唯物主義、自然主義」と「理想主義」の矛盾を乗り越えていくことができると語られている。精神と身体という対立軸の中に媒介項を持ち込むことよつて、その対立を乗り越えようとした大正期の論壇において、その媒介項が「生命」であつたわけである。

また、このような二元論的対立の超克が、大正期の論壇において希求され始めた背景としては、明治四十年代の自然主義文学やそれに立脚した批評の行き詰まりが明確に意識され始めたことが挙げられる。欲望に実存的中心を求める生の在り方は、最終的にあらゆる倫理的価値を否定するような懷疑主義に陥らざるを得ず、生の充足はそこには存在しないことが明確に自覚され始めたのである。

茅原華山が主宰した雑誌『第三帝国』は、そのタイトルをイブセンの戯曲『皇帝とガリヤ人』に由来して

いるが、この戯曲で語られた第三帝国の思想について、島村抱月は「霊と肉、智識と信仰の争の次に来る文明が、即ち第三文明であると名づけたものにはかならないのである、云ひ換れば霊肉の一致、知識と感情の一致に立つ帝国でなければ真の帝国ではないといふ思想を説いたものである」と説明している。<sup>8)</sup>「肉」と「智識」、つまり自然主義と科学主義イデオロギーなど眼に見えるものだけを信じる近代主義がもたらしたものは、精神的価値の否定、ニヒリズムにすぎなかつたのであり、その後に来る新しい文明として霊と肉の一致が希求されている。

このような思想的文脈の中で、ベルグソニズムもまた理解され移入されていった。そして、大正期における晶子の文明批評、社会批評においても、そのパラダイムの圈内にあつたことを示す言辞を確認することができるのである。

#### モラルと主体——晶子と婦人解放思想

さらに、晶子の評論とベルグソニズムの関係性について考察を進めていきたい。

前掲「鏡心燈語」において晶子は次のように述べている。

既に生活が不斷に移つて行く以上、私たちの倫理観もまた不斷に移らねばならない。永久の真理というものを求めることの愚は琴柱に膠するにひとしい。永久の真理というような幽霊に信賴して一方のみを凝視している人が、刻々に推移する人生に対して理解も判断もできず、自分が人生の本流に乗ることを忘れ時代の競走に落伍していながら、かえって反感と否定とを以て世の澆季罵つたりするものである。

この言辭にはベルグソニズムの影響の跡がはつきりと現われている。生活が生成変化していく以上、倫理もまた生成変化していくべきであり、ひとつの見方に囚われるべきではないというのが晶子の主張の眼目であるが、当然のことながら晶子は、あらゆる真理は相対的のみにみ真理で有り得るといったような虚無的気分を表明しているのではない。それぞれの倫理は時間の経過とともに囚われた思想の変化していくとしても、それぞれの現在性において普遍的真理であると主張しているのだ。

それでは、なぜやがて囚われた思想に転落してしまうような倫理が、現在という時点においては普遍的真理であることが保証されるのか。晶子は『「女らしさ」とは何か』<sup>(9)</sup>において、「現代に入つて、舶載の学問芸術のお蔭で『流動進化』の思想と触れるに到つても、動もすれば、新しい現代の生活を呪咀して、微の生えた因習思想を維持しようとする人たちを見受けます」と述べている。この言辭で語られた、「微の生えた因習思想」を否定する『「流動進化」の思想』とは、ベルグソニズムを指している。そして、『「流動進化」の思想』においては、生滅変化を繰り返す情動が、生命という絶対的価値の躍動する姿として捉え直されており、結果として、「流動」に内包された普遍的眞理性が保証されることになる。

同時代の他文献に眼を転じても、同様の思想は多数確認することができる。大島正徳は「ベルグソンの倫理的帰結」<sup>(10)</sup>において、「彼れ（筆者注、ベルグソンを指す）の哲学の最も重要な点は持続といふことで、其は絶えず変化して流れ移つて行くといふ意味で、其が即ち生命のある所、心的生活の眞理、宇宙過程の真相」であると論じた上で、次のように述べている。

彼は眞の自由を、全心的決定を要する非常の場合に見出した。例へば、我々が道德的危機に触れて、全心を以て、全自我全人格を以て決定するやうな時に、眞に自発的な生ける自由があるとした。此の場合の

意識状態は全心が一如に総合して活動するので、彼れ是れの原因を以ては説明すべからざる有様である。どの訳この訳といふやうな観念的に取扱ひ得る状態ではなく、只全人格の活動して決定する状態である。凡てが動き、動いて新しく決定するのである。此の具体的全心的進動其者が自由である。要するに、自由とは持続の只中に直観し得ることで、理論的に自由を証明することは出来ぬ

晶子の言う「流動変化」が、ここでは「持続」と言い換えられている。生命は生成変化を繰り返しながら創造的進化を成し遂げていく無限の過程であり、それは理知や論理によつて捉えることはできない。もし、論理的に見て矛盾に見えたとしたら、それは生命という絶対的な価値を理知という偏つた見方に囚われて眺めているからであり、一見、矛盾に見える生命の本質は自らの生命によつて直観しなければならぬ。噛み砕いて言えば、このようなことにならう。

ベルグソニズム受容を通じて移入されたこのような生命観を通じて、矛盾は矛盾のまま乗り越えられることになる。逆から言えば、生命という表象はあらゆる矛盾を包摂する万能の概念であつた。個人的幸福の追求や主体性の獲得に倫理的価値を求めようと、家族への献身に倫理的価値を求めようと、どちらにしてもそれは生命という普遍的価値が特殊化された形で顕現した姿として意味づけられる。その結果として、相矛盾する二つの価値は矛盾したまま、それを「直観」したそれぞれの瞬間において、普遍性が保証されることになる。晶子が「私たちの倫理観もまた不断に移らねばならない」と主張したのも、そのことによつてのみ、生成変化を繰り返す生命との交感を維持し続けることができるからである。

晶子の大正期における女性解放運動に対する姿勢もまた、以上のようなベルグソニズム受容を視座とした時、その一端を理解できる。「母性偏重を排す」<sup>(1)</sup>には次のような言辭が存在する。

私が母となつたことは決して絶対的ではなかつた。子供の母となつた後にも、私は或一人の男の妻であり、或人の友であり、世界人類の一人であり、日本臣民の一人である。(中略) 其等の諸性の一つが次の時には現在の中心である母性に代つて私の生活の中心となり、更にまた他のものが次ぎ次ぎに代つて行く。其等の無数に起伏して異つた中心を作る諸性が互に輔け合い、埋め合せ、もしくは互に返し撥ね返し、闘争して、不断の流転を続けることに由つて私の自我は成長し私の生活は開展する

この言辭において晶子は明らかに、ベルグソニズムを女性問題に應用する形で批評を展開している。「私の自我」は「不断の流転を続ける」。つまり、ある瞬間においては母性愛を至上の価値として感得し、別の瞬間には夫への愛を、友情を、同胞への愛を、人類愛をと、それぞれの現在性において生命から湧き出る倫理的価値は変化を遂げており、それこそ自分自身、つまり主体の主体性であると晶子は言っているのだ。

とするならば、その論理的帰結として、一つの倫理的価値が絶対視され、それと対立するような、他のあらゆる価値を排除するようなイズムはすべて、生命という普遍的価値、つまり自分自身 $\parallel$ 主体を抑圧する囚われたる思想に過ぎないことになる。同じ「母性偏重を排す」において晶子は、「旧式の賢母良妻主義に人間の活動を束縛する不自然な母性中心説を加味して此上人口の増殖を奨励するやうな軽佻な流行を見ないようになりたいものである」と述べている。別にここで晶子は良妻賢母であることを否定しているわけではない。母性愛も夫への愛も自身の生命に内属しているわけであるから、良妻賢母であること自体は肯定されるはずである。晶子が批判しているのは、良妻賢母主義である。つまり、良妻賢母であることだけに超越的な価値を認め、それ以外の価値をすべて排除していくようなイズムの在り方が、生命を排除していくと言っているのだ。

また、もう一方で晶子は、『人及び女として』<sup>(12)</sup>の自序で、「因習の束縛から脱した聡明な女は在来の女と違つ

て自律的合理的に一層よく其貞操を徹底すべきものだと思います。私はまた個人の独立を求めて、利己的頹廢的な孤立に反対します」と述べている。貞操を否認するような女性の自立は頹廢に過ぎないと言っているわけだが、晶子はベルグソニズムの受容の過程で獲得した生命観を視座として、婦人解放思想もまた、それを超越的な価値として位置づけてしまうと、良妻賢母であることに内包された倫理的価値、つまり生命に源を持つ母性愛、夫への愛という普遍的価値を抑圧することになると批判しているのである。

先に私は、大正期においてベルグソニズムは精神と身体／欲望、あるいは霊と肉の齟齬を解消していく思想として移入されたことを論じた。以上が晶子がベルグソニズムを援用する形で達成しようとした、婦人問題における解消の位相である。婦人解放思想と良妻賢母思想が対立矛盾する中であって、両者を統括する生命という普遍的価値を導入し、そこに主体の主体性を定位することによって、晶子はそれぞれに内包された倫理的価値を保持し、同時にいずれかに囚われること自体が生命の抑圧につながるとして退けようとしている。晶子にとってそれは決して折衷や弥縫を意味するものではなく、それこそが、生命を完全に發揮していく方途であったのである。晶子の批評において主体の主体性は、自身に内属する生命の特殊化され限定された姿としての倫理的衝動として捉え直されている。だからこそ、良妻賢母であることと個人的幸福を追求することを齟齬として捉えること自体が、晶子にとっては転倒を意味することになる。晶子にとってそれは対立ではなく「不断的流転」である。大正期における晶子の婦人解放問題に対する姿勢は、ひとまずこのように総括することができるであろう。



〈生命〉という陥穽——「三面一体の生活へ」の問題圏

これまで論じてきたような晶子における肉と霊の一致、あるいは良妻賢母思想と婦人解放の一致は、もう一方において深刻な瑕瑾を内包している。最後にこの問題について論じておきたい。

たしかに、生命という両者を包括する表象を導入することによって、対立は空想の上では超克することができる。それぞれの情念を時間軸上に並べて、両者が矛盾していると見えたとしても、それは生命に対して盲目である我々にそう見えるだけであり、「不断の流転」の中にある生命の側から見れば、それぞれの現在性において普遍的真理なのだ、ということになる。しかし、まさに生命に対して盲目的、言わば頹落の中にある世人の側から見ると、それでは何も解決したことにはならない。たとえば、個人的幸福の追求と家への献身が共時的に要求された場合、つまり現実圏域において、時間的ではなく空間的に配列された場合、どちらも生命の顕現化された姿であると言ったところで、何の解決にもならない。この時点で生命という表象が文字どおり表象にすぎないことが明らかとなる。テリー・イーグルトンは、「美的イデオロギーは、言語の圏域と現実の圏域のあいだにある偶発的、懐疑的な関係を抑圧することによって、言語のほうを自然な現象として説明づけるようにする<sup>(13)</sup>」と述べているが、晶子は美的イデオロギーとしてベルグソニズムを受容していると言つてよい。現実圏域の諸矛盾を包括すると仮想された、生命という表象を導入することで、すべての対立は空想のレベルで乗り越え可能となるのである。さきに私は、霊と肉、良妻賢母と婦人における主体性の獲得を矛盾と捉えること自体、晶子から見れば、転倒であると論じた。しかし、認識論的転倒を犯しているのは、実は晶子の方である。あらゆる対立を包括する表象の方が、現実よりも〈自然〉であるならば、それは現実圏域にお

る矛盾・葛藤・対立の隠蔽以外のなものでもない。

このような晶子の批評が内包する問題がさらに深刻な形で現われているのが、「三面一体の生活<sup>(14)</sup>」である。大正期において、肉と霊、あるいは身体と精神の問題は、同時に公と私、つまりの個人的生活と公共的生活、さらに個人と国家の問題と、同じパラダイムの圏内において論じられている。たとえば、婦人における主体性の獲得と良妻賢母思想の対立は、同時に個人の幸福と臣民の義務のどちらを優先するかという問題を内包している。

同時代の文献に眼を転じてみても、生命を媒介とした個人と国家の対立の解消を主張した言辭は多数、存在する。

一 生命の力が、他の生命の力に働きかけ又は働きかけられる所に、既に社会生活が成立し、而して彼我生命の交渉によつて、互に或は深く或は浅い変化影響を受ける所に、社会生活の精髓が存するとすれば、自我生活と社会生活とは到底引き離しては考へられない。社会生活が多数の自我生活の交渉や結合によつて成立すると同じく、自我生活は、ひとへに社会生活によつてのみ成立するものと言つて差支えない。

金子筑水「生命力の交感」<sup>(15)</sup>

我等の個性は宇宙との交通を求めてゐる。かかるが故に個性は独立ではあるが、孤立ではない、より広く個性が宇宙間に浸透するほど生命の価値を生じる（中略）今日の個人主義は個人の為めの個人主義である。余りに個性の価値を重大視して、却て自己を孤立せしめるの不自然を敢てしてゐる。（中略）かやうな絶対的個人主義は、不自然に個人を宇宙から、民族から切り離して、精神的に孤立せしめる。

中沢臨川「生命の伝統」<sup>16</sup>

などがそれにあたると。これらの内、とくに興味深いのは、臨川の場合、「宇宙」と「個人」の間に「民族」という媒体を導き入れている点である。つまり、個人に内属する生命とは、「宇宙」という普遍的価値との交感によつて成立し、それは「民族」という媒介項を通じて可能となるという図式が、そこには入り込んでいる。だからこそ、「宇宙」からの疎外は同時に「民族」からの疎外でもあり得るのである。このような臨川のロジックにおいて、「民族」とは「宇宙」という普遍性が特殊化された形態として位置づけられている。そして、晶子が「三面一体の生活へ」で取り組もうとしたのも、個人と国家の問題であつた。「三面一体」とは「個人」として、国民として、世界人としてという三つの面を持ちながら、それが一体であると云ふ生活」を意味している。晶子に言わせれば、「誰にも明瞭な共通の実感」としては、「三つの生活が自然に融和流動して」おり、「必要に応じて或は個人本位の面を生活の中心とし、或は国民本位の面を、或は世界本位の面を生活の中心として濃く彩つている」、「決して三つの生活が分裂して居るのでは無く、却てさう見えるまでに三つの生活の差が塗り消され融かされて一体となつてゐる」。このような晶子の着想の背景にベルグソニズムの受容があることは、もはや言うまでもない。主体に内属する生命の「不断の流転」の過程で、人は個人として生活し、国民として生活し、世界市民として生活していると晶子は言っているのだ。したがつて、三者はその起源において同一であることになる。繰り返しになるが、もちろんそのように言つたところで現実圏域においては、解決不可能な問題は無数に存在する以上、対立を隠蔽するだけである。そして、さらに問題なのは、臣民であることも生命の發揮であるというロジックの内には、臨川と同じく、民族は生命という普遍的価値と交感していく媒体であるという前提が、内包されている点にある。大正期においてすでに、三井申之は、「国体は生命であ

る故に常に開展して居るのであつて、日本の国体は今日まで不斷の開展をなしてきたからして今日世界に比類なきものとなつて居る<sup>(17)</sup>と語つて居る。ベルグソニズムを援用した国家有機體説であることは一見して明らかであるが、晶子においても、論理を敷衍していけば必然的にそこに行き着く。

「三面一体の生活へ」において晶子は、第一次世界大戦に触れて、次のように述べている。

戦争が最早国民生活の利益になるので無いことも此度の大戦争で明白になりました。個人生活を虐げ、世界生活の平和を攪乱して置いて、ひとり国民生活が幸福に成長し得るもので無いことも明白になりました。この三つの生活が協同し、連関し、融和して、初めて人間の生活はその全体の完成を期待することが出来ると云ふことを知る時代が来たのです。(中略)この方法を実現しようとすれば、第一に愛の世界的協同が必要になります。博愛的世界主義というか、人道的世界主義というか、名は何れにもせよ、人類が相互に愛し合ひ扶助し合ふ実行が起こらねばなりません。

右の引用において問題なのは、「三つの生活が協同し、連関し、融和して、初めて人間の生活はその全体の完成を期待することが出来る」という箇所である。主体に内属する生命を発揮することは、同時に国民としての倫理あるいは義務に適うことであり、さらにそれは人類に貢献することでもあるという状態が、晶子の理想態である。そして、晶子にとつて生命の内実が「愛」であるのだから、たしかに、その顕現化は社会生活への参加、あるいは世界市民としての人類への貢献と齟齬をきたすことはない。

そして、そのような晶子にとつて、国家は「三面一体の生活」の実現を可能ならしめる限りにおいて認め得るものであつた。「個人の愛(個人の道德)」と世界人類の愛(世界人類の道德)とを裏切つた国家主義に反対しま

す」という「三面一体の生活へ」の言辭は、〈愛〉という生命／普遍的価値を發揮していく媒体としてのみ、共同体もまたその存在理由を認め得るといふ晶子の国家観を直截に語っている。

このような主張は一見、理に過っているように見える。しかし、柄谷行人は「共同体や国家は実在しても、『世界公民的社会』というものは実在しない。ひとは共同体に属するのと同じような意味で、世界市民であることはできない。世界市民的であろうとする個人の意志をとれば、世界市民的社会は存在しない」と論じている。実際、今日から見れば、戦時下における多くの作家は、「世界市民」として生きることができなかった、あるいは、主観的にはそのように生きているつもりが、客観的にはエスノセントリズムに囚われているに過ぎなかった。

たとえば、武者小路実篤は『大東亜戦争私感』<sup>(19)</sup>において次のように語っている。

人類全体の立場から言つても、A人種がB人種の奴隸的存在として無教育な、又不十分な發育きり出来ないやうな状態の下に置かれてゐて、十分にその生命を生かすことが出来なかつたら、その損害ははかり知ることが出来ないものがある。(中略)日本の使命は東亜を眞の東亜にし、東亜民族が米英人から輕蔑されず、本来の生命を益々忠実に生かせるやうにすることである。

「人類の意志のよしと見る生活を送つてこそ、我々は内に生命に満ちた」ものになると唱え、「個人の生命の完成」が「人類の完成」につながる<sup>(20)</sup>と主張した武者小路の眼には、大東亜戦争は東亜民族の解放を通じて、「本来の生命を益々忠実に生かせるやうにする」ための、「人類の意志」に適った聖戦として映っている。武者小路は日本という共同体が「人類の意志」といふ普遍的価値の実現を目指していると言つてはいるが、実際

は逆である。大東亜戦争や大東亜共栄圏の正当性を保証するために、「人類の意志」という普遍的価値を、共同体の側に引き寄せ、内属させてしまっているにすぎない。当然、戦争という現実圏域は隠蔽される。それどころか美化されていく。「世界公民社会」なり「人類の意志」、あるいは「世界人類の愛」と言ったような、国家を超越する普遍的価値を設定しても、それは制度として存在しているわけではない。だからこそ、戦時下において武者小路の思考は、現実を前に敗北していく。「人類の意志」によつて、国家や民族、そして戦争を追認していくことになる。しかも、実際には、共同体の側に普遍的価値を引き寄せているにもかかわらず、言葉の上では、日本民族が「人類の意志」の実現を目指していると語ることで、主客の転倒は隠蔽され、結果、現実圏域に戦争の遂行は美化されていく。

そして、晶子もまた「三面一体の生活へ」において次のように語っている。

私達は歴史的、地理的、生産的、政治的の差別の自然的必要から、国民としての協同自治機関である国家を尊重し擁護します。併し人種的の差別は最早国民の協同生活の上に何の条件にもならない事を認めます。私達は世界何れの人種の帰化をも拒まず、現に朝鮮人の全部と支那人の一部とを包容した国民生活を営んで居ります。私達の愛する国家は、他の国家と他の国民を峻拒し若くは敵視するやうな排他的の目的を少しも持たず、歴史的、地理的、生産的、政治的の特殊な差別関係によつて集団生活を持續して居る日本国民のために専らその自治改造の確実な機関たる外に何の目的もないものでありたいものです。(傍線野村)

ここで言うところの「私達」とは、晶子自身は「日本国民」とは言い換えているものの、「朝鮮人の全部と

支那人の一部」に対する「私達」である以上、「人種」としての日本人を指さなければならぬ。「日本国民のために専らその自治改造の確実な機関たる外に何の目的もないものでありたいものです」(傍点野村)という言葉は、日本はそうではないという意味であるのか。もしそうであるのなら、生命の「不斷の流転」の中で、臣民としての義務を果たすところに生活の中心が移る瞬間があつてはならないはずである。では、大日本帝国という国家は「自治改造の確実な機関たる外に何の目的もないもの」であるのか。もしそうであるならば、朝鮮併合も、婦人解放思想と良妻賢母思想の対立も起こらないはずである。このアポリアを解決するために、晶子は国家に代わつて、「日本国民」Ⅱ「人種」という媒介項を導入する。現実圏域においてさまざまな問題が存在するのは、「日本国民」が内包する生命、「朝鮮人」や「支那人」が望む日本への「帰化」を「包容」するような「愛」を、国家が体現していないからであるというような、論理上の迂回路を作り上げている。

### おわりに

これまで見てきたような、晶子の思想を敷衍していけば、「日本国民」Ⅱ「人種」としての日本人が内包する生命を国家が完全に体現した時、「三面一体の生活」は実現されることにならう。そして、晶子は昭和七年、「日本国民たることの幸ひ」<sup>(2)</sup>において、次のように語ることになる。

日本は同じ法治国と云つても、権利義務の思想のみを基本とする国でなく、先史時代より皇室を中軸として其れに帰向する国民の超批判的感情に由つて結合された国である。この感情は久しい歴史的経過の間  
に拡充された特殊のもので、宗教的とも芸術的とも看做すべき神秘性と審美性を備へてある

さらに晶子は、支那事変に言及して、「満蒙の野に戦死する支那兵は、軍閥の強制の下に、軍閥の支持を目的に死ならしめられるのであって、我國の軍隊が陛下の大権に由り、極東の平和を確保する正権な目的のため、陛下の将卒として戦ふのとは全く意義を異にしてゐる」とも語っている。上笙一郎は「愛国と侵略とが、楯の表裏のように結びついている日本のナシヨナリズム——晶子の血のなかに流れていたナシヨナリズムは、まさにこれであつた」と論じ、さらに「彼女のいだいていたナシヨナリズムが、最初から明治のその規格版でしかなかつた」と論じている。しかし、事情はいま少し複雑である。大正期に晶子が受けたベルグソニズムの洗礼を、上は看過している。国家と個人の対立をベルグソニズムを援用して解消しようとした時、晶子は、個人であること、共同体の一員であること、世界市民であることの齟齬を未解決のまま隠蔽してしまう。結果、朝鮮併合は「帰化」を求めた朝鮮人を「人種」として日本人が「包容」した出来事として、支那事変は「極東平和」実現のための聖戦として、そして、国家は「神秘性と審美性とを備へてゐる」「国民の超批判的感情に由つて結合された」道徳共同体として、捉え直されていくことになる。

確かに大正期の批評において、晶子は平和を希求し、戦争に反対し、国家を批判している。しかし、晶子の批評は、表面的には見えない領域において、つまり構造において、むしろ彼女が目指したものは逆のものを招来している。主観的には平和を希求しているはずの晶子は、実は侵略や戦争、国家と個人の対立という現実圏域を隠蔽してしまふ美的イデオロギーを、啓蒙してしまつてゐる。大正期における晶子の批評は、彼女の主観を裏切る形で、武者小路の「大東亜戦争私感」のような、戦時下のエスノセントリズムがやがて形成されていくに到る思想的水脈の中に位置している。少なくとも、そのような側面を有していると、今日から見れば、言わざるをえない。



注

- (1) 『太陽』 大正四・一―二
- (2) 『激動の中を行く』 アルス 大正八・八
- (3) 『六合雜誌』 大正元・九
- (4) 『哲学雜誌』 大正元・一〇
- (5) 『新潮』 大正三・一〇
- (6) 『三田文学』 大正四・八
- (7) 『六合雜誌』 大正三・九
- (8) 『イブセン劇の第三帝国』／『第三帝国』 大正二・一〇
- (9) 『婦人倶楽部』 大正一〇・二
- (10) 『丁西倫理会倫理講演集』 大正三・一〇
- (11) 『太陽』 大正五・二
- (12) 天弦堂書房 大正五・四
- (13) 鈴木聡他訳 『美のイデオロギー』 紀伊国屋書店 平成八・四
- (14) 『太陽』 大正七・一
- (15) 『太陽』 大正二・九
- (16) 『中央公論』 大正四・七
- (17) 『日本及日本人』 大正二・六
- (18) 『トランスクリティーク―カントとマルクス (3)』 『群像』 平成一〇・一一
- (19) 河出書房 昭和一七・五
- (20) 『人類の意志』 岩波書店 昭和一〇・七

(21) 「日本国民たることの幸ひ」 『横浜貿易新報』 昭和七・一・一

(22) 「与謝野晶子の思想」 『日本文学』 昭和三八・一

本稿は、拙稿「大正期のベルグソニズムと与謝野晶子」(『鉄幹と晶子』第五号)を大幅に加筆補正したものである。